

9浪で早稲田大学へ入学した濱井正吾さんに聞く

失敗を敬遠する現代で、 あえて『多浪』人材を語る

少子化による人材不足の中で、若手の採用が難しくなりました。そこで、企業の人材の選び方にも変化が出てきます。リクルートワークス研究所が2022年に発表した「新卒・中途採用横断レポート」によると、2023年卒において通年採用を実施している企業は26.7%で、そのうちの58.7%が新卒・既卒の区分にこだわらない若手の採用をしています。多くの企業が求める「多様で優秀な人材」はどうやって手に入れられるのでしょうか。教育ジャーナリストとして活躍する“9浪はまい”さんに昨今の事情を伺ってみました。



“9浪はまい”こと
濱井正吾さん

大手IT企業はこれまでの「新卒一括採用」を廃止し、2026年卒入社者の新卒採用から「通年採用」を行うと発表しました。学生が大学や大学院を卒業後、間をあけずに企業へ就職する「新卒一括採用」は、「終身雇用」「年功序列」とともに日本独自の制度。しかし、近年は「終身雇用」「年功序列」が崩壊し始めて、この「新卒一括採用」にも変化が見られるようになってきました。

若手を採用することは会社の将来のための投資です。しかし、若手、特に新卒の離職率は高いままです。厚生労働省によると、就職後3年以内に新規大学卒就職者が離職した割合は、34.9%となっています（令和3年3月に卒業した新規学卒就職者）。

また、メンタルヘルス不調になる若者は増えています。20代の若年層ほど生活の質に影響を与えるような強い不安や悩み、ストレスからくる体の不調を経験しています。心の病が原因で退職する場合も20代で多くなっています（パーソル総合研究所「若手従業員のメンタルヘルス不調についての定量調査」）。

プライベートを大切にしたい、そうできない場合は転職を視野に入れるという若者が多く、若手に選ばれる企業になるには、ワークライフバランスが良い社内環境を作ることが一つの

1990年生まれ、兵庫県出身。仮面浪人、社会人経験を経て、延べ9浪で早稲田大学教育学部国語国文学科に一般入試で合格した。早稲田大学卒業後、株式会社カルペ・ディエムに入社、「パンカラジオ」（登録者120万人）など、若年層に人気のYouTubeチャンネルに出演。著書に『浪人回避大全「志望校に落ちない受験生」になるためにやってはいけないこと』（日本能率協会マネジメントセンター）、『多浪で人生変えられますか？』（笠間書院）。

ポイントでしょう。逆に、企業側は自社が望むような人材を選び出すには、どうすればよいのでしょうか。

失敗を恐れる時代だからこそ

「具体的にどんな人材がほしいかはそれぞれの会社で異なるでしょうが、ストレス耐性があり、目標に向けて着実に取り組むことができる人たちを望むなら、『多浪』経験者の多くが当てはまります」

こう話すのは、これまで120人以上の浪人経験者に会ってインタビューしてきた教育ジャーナリストの濱井正吾さんです。

「多浪」とは、大学受験に複数回挑戦したことのある人のこと。そもそも浪人は就職に有利なイメージはありません。しかし、濱井さんは長期間において浪人経験を持つ多浪の方たちと触れ合う中で、多浪経験からその人が得られたものの大きさを発見。浪人しないに越したことはないけれど、それをただの失敗と捉えるのではなく、失敗も、活かし方があると話します。

そもそも失敗を敬遠する現代の世の中で、そのような価値観は通用するのでしょうか。



YouTubeチャンネル出演
が書籍発刊のきっかけになつた

自身の失敗から多浪120人へインタビュー

自身も9浪という多浪経験がある濱井さん。裕福とは言えない家庭で育ち、親の勧めるままに就職に有利な地元の高校に入学しました。しかし、高校で壮絶ないじめに遭い、不登校に。楽しいはずだった学生生活を奪われたことで、次第に「大学に行って学生生活をやり直したい」「いじめた人を見返したい」という気持ちが湧いてきます。こうして、推薦で関西の大学へ入学、その後は龍谷大学へ編入。龍谷大学には全く不満がなかったものの、在学中から4年間の仮面浪人をスタート。龍谷大学卒業後は受験費用を貯めるためいったん就職。昼は会社、夜は予備校という生活を送り、2年間で300万円を貯めて会社を退職。その後の2年4か月を受験勉強に充て、9年がかりで念願の早稲田大学への入学を果たしました。

その稀に見る経験と教訓を『浪人回避大全「志望校に落ちない受験生」になるためにやってはいけないこと』（日本能率協会マネジメントセンター刊）として2022年に出版しました。

「浪人はしない方がいいというのは大前提です。でも、もし浪人することになっても、セーフティーゾーンがあつたらいいなと思っています。浪人、それも多浪した人はあまりその経験を語りたがらないので、これまでロールモデルがいなかつたんです。同じような経験を



初めての著書『浪人回避大全「志望校に落ちない受験生」になるためにやってはいけないこと』

した人の話を聞いて、辛い状況にある人が救われればいいなと本にしました」と出版への思いを語ります。

その後、2025年9月末に、『多浪で人生変えられますか?—大学受験と格闘した20人の記録』(笠間書院)を出版しました。これまで120人以上の多浪経験者から話を聞いた中で、20人を選りすぐり、本にしました。

その中で一番印象的だったというのは、19浪の方だといいます。

「とても明るい人で、『浪人生活が辛くて病んだことはない』と語る姿に驚いた」そうです。先が見えない浪人生活の中では、自分には才能がないと自己不信になることや、周囲からのプレッシャー、焦りや不安を感じることもあるでしょう。しかしそういった環境の中でも、ポジティブに物事を捉えられる、その理由は何だったのでしょう。

「夢に対する思いが人より何倍も強いというのが多浪の特徴ですね。多浪に対するイメージが世間で悪いとわかっていても、その大学や学部に入りたい、入ってその先にある自分の夢を叶えたいという意志が強い人が多いんです」

挫折を経験した人はメンタルが強い傾向にある

今、浪人生はピーク時の約3分の1に減少したといわれています。浪人という選択肢が減っている中で、それでも浪人を選んで何回も挑戦を続けるのは、どのような人たちでしょう。

多浪して人生を甘く見ていた自分に気がついたと、自分自身の考え方やそれまでの方法を改めたり、戦略を練って、努力を積み上げられる人たちだと語ります。

「現時点の自分の実力を客観的に分析し、どうしたら目標を達成できるのかを考えられるようになります。合格というゴールに向けて、どのくらいの時間かけて何をしなくてはいけないか道筋をつけていくようになります。多浪期間にそれを学んで、社会人としての能力が身についたと自己評価する人もいます。自分と向き合う期間として有効に使えた人は、浪人生活を後悔してはいないのではないでしょうか」

濱井さんがこれまでお話を聞いた方たちの中で、浪人したことを後悔していないと答えた人は8割もいたそうです。「やればできる」「自己肯定感が高まった」「自分の意志で選択したことを貫けた」「挫折があったから今がある。自分と向い合い、自分を知ることが



中学時代は野球部に所属。「野球選手か、ゲームクリエイターになるのが夢だった」という



中学時代の濱井さん。
自分に自信がないタイプだった

文／平井明日菜、写真／濱井氏提供

できた」というプラスの意見が並びました。

では、2割は後悔しているのかと彼らの声を聞いてみましたが、「医学部入学が遅れ、医者になるのが遅れた」「若くて貴重な時間をムダにしてしまった」「今だったらもっと効率的に勉強できた」などという気づきがあり、時間を取り戻すことはできませんが、その経験も人生の教訓として捉えているところがありました。

「私がそうだったように、浪人は人生において一発逆転の手段だと思います。受験の失敗をただの失敗で終わらせるか、成功体験にするかは本人次第。成功した人は、才能という壁に努力で立ち向かった人たちだとインタビューを通じて実感しています。多浪によって、その後の社会人生活に必要な思考力・判断力などを養えたという人は多いのではないか」と濱井さん。

年齢や卒業時期でくくなってしまうと、せっかく良い人材がアプローチしてきているのを見逃してしまうかもしれません。いろいろな経験をしてきた人が積極的に受け入れられていくようになると、多様なアイデアが出る良い組織となり、また、持久力のある人材力を発揮できる息の長い組織となるのではないかでしょうか。濱井さんはこう続けます。

「もし、採用面接のとき、履歴書の空白の部分を見つけたら、その間、何をしていたのかとぜひ聞いてみてください。ストレス耐性があり、何事も諦めない、そんな多浪経験者が見つかるかもしれません」

「多浪なんてデメリットばかり！」そんな世間の声に負けず、志望校を目指した浪人生たちは何を手に入れたのか？が知りたいという想いから、先に挙げた著書「多浪で人生変えられますか？」製作にあたって、20の方に勉強法だけでなく、それぞれの人生を聞きました。この本では、受験の実際を知りたい人、憧れの大学を目指して今頑張っている人、自分を変えたいと願う人に、多浪で発見した人生の可能性を伝えています。濱井さんは、浪人生に限らず、世の多くの方に向けて「失敗を恐れず、挫折を乗り越えて進む人の強さを、これからも発信していきたい」と語ります。



9浪（27歳）で早稲田大学に入学



早稲田大学卒業写真



多浪で人生変えられますか?
—— 大学受験と格闘した20人の記録

濱井 正吾 著 ¥2,090 (税込)
発行: 笠間書院 2025年9月刊行